

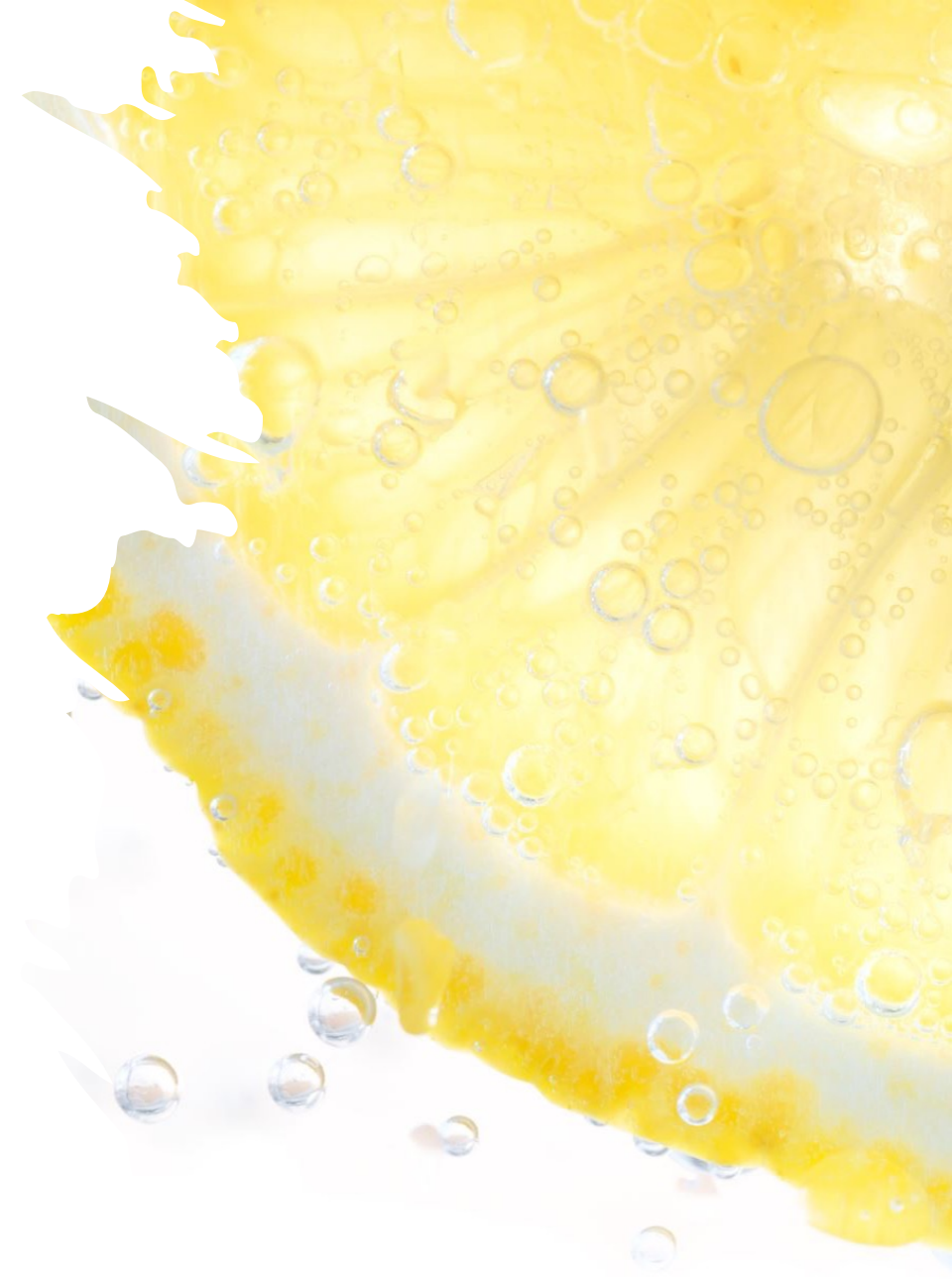
日本における 親密な関係間の 性暴力の判断に 関する考察

JAMSNETドイツ

性暴力・家庭内暴力の勉強会

北風菜穂子（大東文化大学）

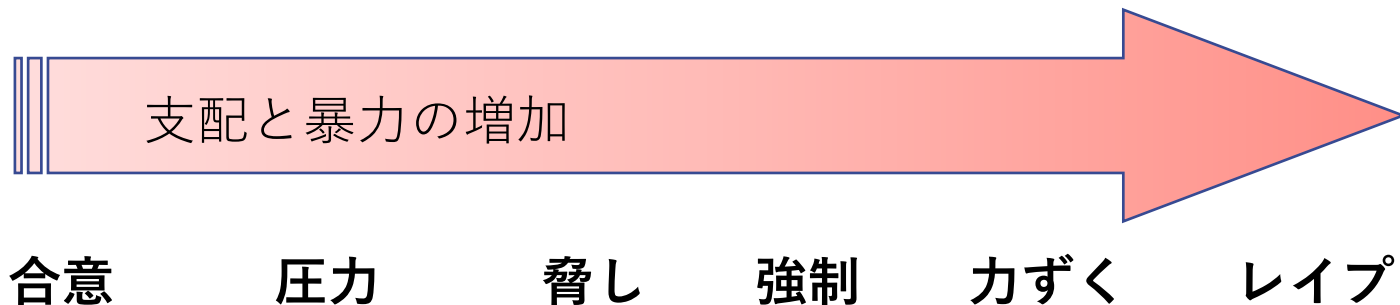
2021.6.26.



1 親密な関係間の性暴力の発見

性暴力（性を手段とした暴力）とは
『男（夫や父親）の「財産」に対する犯罪（強姦）』
ではなく
（女性の）『人格的統合性と性的自己決定権の侵害』

- 1960s後半～ 第2波フェミニズム運動
- 親密な関係間の性暴力やDVが性差別の中核にある
- 性暴力の連続体 (Kelly, 1987=2001)
女性の性交経験は合意かレイプかではなく、その連続体上に位置する



2 日本における性暴力の定義

- 一方、日本の刑法上の性犯罪（強制性交、強制わいせつ）の定義では、親密な関係間の性暴力をとらえきれない
- 暴行・脅迫要件の見直し、および不同意性交等罪の創設が必要ではないかという議論がある

2017年 刑法改正による名称変更と一部の構成要件と法定刑の見直し

【改正前】 刑法第一七七条（強姦）

暴行又は脅迫を用いて一三歳以上の女子を姦淫した者は、強姦の罪とし、三年以上の有期懲役に処する

【改正後】 刑法第一七七条（強制性交等）

一三歳以上の者に対し、暴行又は脅迫を用いて、性交、肛門性交、又は口腔性交をした者は、強制性交等の罪とし、五年以上の有期懲役に処する

3 日本における性暴力被害の実態

被害届を出さずに沈黙を守る被害者が多く、実態把握は困難

1) 警察庁 (2020) 刑法犯認知件数 (被害届が出され受理されたもの)

	2019
強姦性交等	1,405件 (犯罪発生率1.1%)

2) 内閣府 (2021) 令和 2 年 男女間における暴力に関する調査

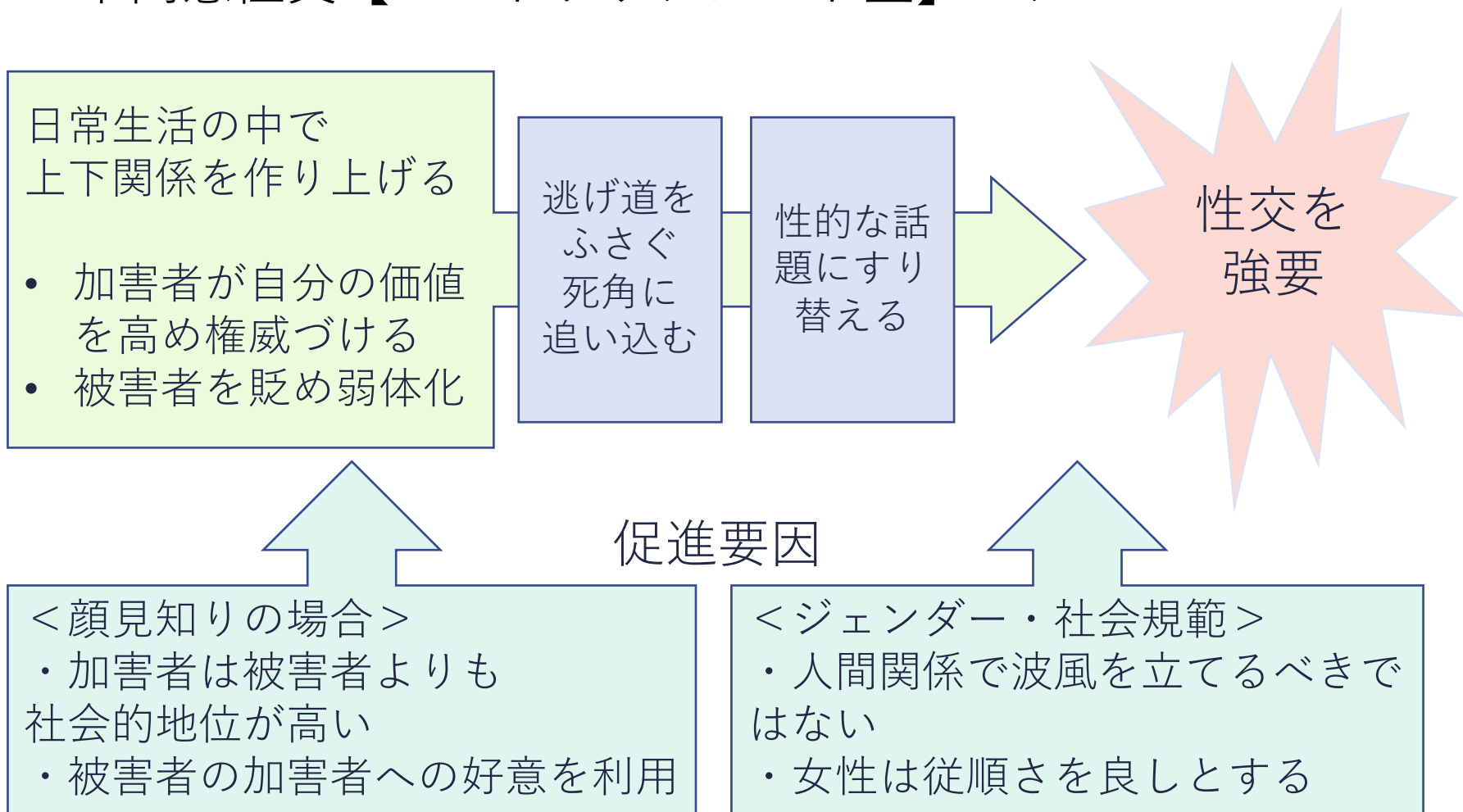
	女性 (N=1,803)	男性 (N=1,635)
1 回以上、無理矢理に性交等された経験がある	6.9% (N=125)	1.0% (N=17)

- ◆ 加害者との関係 「まったく知らない人」 女性11.2% 男性17.6%
- 「交際相手・元交際相手」 女性31.2% 男性11.8%
- 「配偶者・元配偶者」 女性29.6% 男性5.9%
- 「学校関係者」 女性2.4% 男性23.5%

⇒ **親密な関係間の性暴力 (デートレイプ) が潜在化**

4 親密な関係間の性暴力の特徴

顔見知り関係で生じる性暴力の特徴（齋藤・大竹, 2020）
不同意性交【エントラップメント型】のプロセス



5 性暴力被害の影響と被害者の困難

- 性暴力被害によるさまざまな**身体的不調、精神的不調**

PTSD（心的外傷後ストレス障害）、抑うつ、不安障害、パニック障害、強迫症状、幻覚・妄想症状、摂食障害、アルコール・薬物依存、自傷行為、希死念慮、自殺企図などのリスクを高める（金, 2006 他）

+

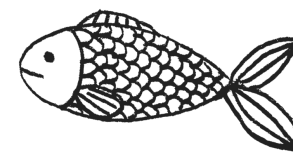
- 「尊厳／主体性への侵害」**（齋藤・大竹, 2020）

自分の意思が無視される、モノのように扱われる体験

⇒自己イメージの侵害と自責による自尊心の低下

↓

- 周囲からの孤立、未来への選択肢が制限される



6 親密な関係間の性暴力における判断のあいまいさ



* 宮地 (2008) を基に作成

	明らかな性暴力 (典型的レイプ)	グレイゾーン (デートレイプ)
回数	単回	複数回
期間	短期	長期
状況	戦時・危機	平時・日常
行為内容	暴力的 / 強制的	非暴力的 / 非強制的
被害者の反応	苦痛 / 危険や恐怖 抵抗し続ける	身体的傷や痛みがない 裏切られ感、混乱、屈服
加害者との関係	敵味方はっきり 見知らぬ人間	敵味方はっきりしない 知人・仲間・家族など
被害者に関する イメージ	純粹・無垢	性的に活発・ふしだら

7 親密な関係間の性暴力の判断に及ぼす「レイプ支持態度」の影響

- ◆ レイプ支持態度をもつ者は、顔見知りや交際相手からの性暴力（デートレイプ）をレイプと判断しない傾向にあり、被害者の責任が大きく、被害によって生じる精神的影響は小さいと判断する（北風, 2019）
- レイプ神話（Rape Myth）：レイプについての偏見的で、ステレオタイプの、誤った信念（Burt, 1980）

レイプ支持態度尺度 レイプ神話を含む、被害者に対して冷淡で非好意的な態度（Lottes, 1998）

- 男性が以前にその女性と性的な関係がある場合、彼女に対して、無理やりセックスしてもある程度正当化される
- 多くの女性は、無意識のうちに強姦されたいという願望を持ち、無意識のうちに攻撃されやすい状況を作り出しているのだろう
- ほとんどの強姦犯の目的は、セックスを行うことである など

8 親密な関係間の性暴力の判断の重要性

- 被害者自身にとって

被害認識の形成、潜在化・再被害化のリスクを減らす


- 周囲の支援者にとって

被害届の提出・相談の促進、二次被害リスクを減らす

- 市民（社会）にとって

裁判における有罪判断や法改正による共通認識の形成、被害者非難への対処につながる

◆ 二次被害：周囲からの反応により被害者がさらに傷つけられる状態



誰にも言わず
黙っていま
しょうね

なぜ
抵抗しなかった
のか？

短いスカートで
相手を挑発した
本人も悪い

9 支援にあたって

- 加害者の責任が問われず、被害者が非難され、性暴力被害が軽視される社会のあり方が問われるべき（戒能, 2021）

⇒親密な関係間の性暴力の判断が適切になされることから始まる

白川（2016）による支援の4原則

- トラウマとその影響、回復に関する知識を身につける
- 被害者の心理的安全の確立のため、対等な関係性を築く
- 被害者が自己コントロール感をもてるよう、選びやすい選択肢の提示によるエンパワメント
- 強み（ストレングス）を基礎とする

+ 何よりも生活支援が優先 睡眠、食事、生活リズムの回復により、日常生活が営めるように支援する

文献

- Burt, M.R. (1980) Cultural Myths and supports for rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 217-230.
- 藤岡淳子 (2006) 性暴力の理解と治療教育 誠信書房
- 戒能民江 (2021) 解説DV・性暴力とは—基本認識と支援の留意点—
一般社団法人社会的包摂サポートセンター編 DV・性暴力被害者を
支えるための初めてのSNS相談 明石書店
- 警察庁 (2020) 令和2年警察白書 統計資料
- Kelly, L. (1987) The Continuum of Sexual violence. In Hanmer, J. & Maynard, M. (Eds.), *Women Violence and Social Control*. London: Macmillan Press. (ケリー, L. 喜多加実代訳 性暴力の連続体
ジャーナル・ハマー、メアリー・メイナード (編) 堤かなめ監訳
(2001). ジェンダーと暴力：イギリスにおける社会学的研究 明石書店 pp.83-106)
- 金吉晴編 (2006) 心的トラウマの理解とケア 第2版 じほう

文献

- 北風菜穂子 (2019) 親密な関係間の性暴力の判断に関する心理学的研究 風間書房
- Lottes, I. (1998) Rape supportive attitude scale. In Davis, C. M. (Ed.) *Handbook of Sexuality Measures*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, pp. 504-505.
- 宮地尚子 (2008) 性暴力と性的支配 宮地尚子 (編) 性的支配と歴史：植民地主義から民族浄化まで 大月書店 pp.17-63.
- 内閣府男女共同参画局 (2021) 「男女間における暴力に関する調査 (令和2年度調査)」
- 齋藤梓・大竹裕子編著 (2020) 「性暴力被害の実際：被害はどのように起き、どう回復するのか」 金剛出版
- 白川美也子 2016 赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア 自分を愛する力を取り戻す〔心理教育〕の本 アスク・ヒューマン・ケア